

同窓会150周年記念事業

長陵同窓会会長 八重樫伸生
(昭和59年卒)



長陵同窓会では東北大学医学部創立を明治5年(1872年)と規定しておりますので、令和4年(2022年)が創立150周年に当たります。そこで令和3年の同窓会総会で医学部創立150周年記念事業として以下の三事業を行うことが承認されました。

第一は長陵同窓会百五十年記念誌(仮称)の編纂です。30年前の同窓会120周年の総会で長陵同窓会百二十年誌(同窓会正史)の編纂が提案され事業が始まりました。編纂委員会は委員長石井敏弘名誉教授を中心に、匂坂馨名誉教授を副委員長、山本敏行元会長を顧問とした委員会が生まれ、6年の歳月を経て平成10年(1998年)に発行されました。総ページ数が1,141ページ、編集後記だけでも12ページという大著で、内容も大変充実しています。それから30年たち人の記憶も薄れ資料も散逸してしまう危険がありますので、この機会に同窓会の歴史をまとめようということになります。今回は消化器内科の正宗教授に編集委員長をお願いし十数名の委員を任命し、彼らが中心となつて編纂を進めています。作成は二期に分けて行い2分冊とする予定です。第一部は、主に学内の先生方だけで編集できるところをまとめて令和六年(2024年)刊行予定です。その後、第二部の編纂に入りますが主に各地区支部の動静やクラス史、サークル活動などをまとめる計画です。第二部の執筆は学外の同窓会員に主にお願いすることになりますので、その際はご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

第二の事業は記念庭園の整備です。星陵会館(医学部生協)の西側には約600坪の松林と池があります。医学部が現在の地(星陵町)に移動した際に個人宅を買収したそうですが、個人の庭をそのまま医学部の中庭として残し、学生や教職員の憩いの場として使われてきました。戦前は四谷用水から池に水を引いていたということですが、現在は湧水を使っています。第18代医学部長で、後に第10

代総長となられた黒川利雄先生(内科学)が「掬水(きくすい)の池」と名付けられ、医学部同窓生の心の拠り所となっています。時代の変遷とともに、周囲の建物がすべて建て替えられたり新築されたりして周囲の建物との取り合わせが変化しただけでなく中庭の面積もだいぶ縮小されました。また樹木の維持管理も十分に行われてこなかったため、現在は中庭全体が鬱蒼とした印象を与えます。そこで150周年を記念して中庭を再整備するプロジェクトを立ち上げました。教職員も学生もみんなが食事をしたり談笑したりできる庭園に造り替えます。歴史ある広い中庭のリノベーションをすることで、何年かぶりで母校を訪れる同窓生には石田広場があった頃の学生時代を懐かしんでもらい、教職員には憩いの場を、医学生にはキャンパスライフを楽しんでもらえる空間を創出したいと思います。

第三は記念式典です。長陵同窓会では昭和47年(1972年)に100周年記念式典を挙げて以来、10年おきに記念式典を盛大に挙げてきました。しかし、令和2年から始まったCOVID-19のパンデミックのために令和4年度内の記念式典は見送ることにしました。この感染症が一日も早く落ち着き、同窓会の先生方とお会いして長陵同窓会150周年式典を盛大に挙げていく日が来ますことを祈念しております。

略歴
氏名 八重樫 伸生(やえがしのぶお)
現職 東北大学大学院医学系研究科 教授
発生・発達医学講座 婦人科学分野 教授
学歴
1984年3月 東北大学医学部医学科 卒業
職歴
1984年8月 八戸市立市民病院産婦人科医師
1990年2月 米国フレッド・ハッチンソン癌研究所ボストク(HPVワクチン開発に関する研究)
1992年2月 東北大学医学部附属病院産科婦人科助手
1994年10月 古川市立病院産婦人科科長
1996年10月 東北大学医学部附属病院産科婦人科講師
2000年10月 東北大学大学院医学系研究科婦人科学分野教授
2012年4月 東北大学東北メディカル・メガバンク機構 副機構長(併任)(2015年3月まで)
2015年4月 東北大学病院院長(併任)(2019年3月まで)
2019年4月 東北大学大学院医学系研究科長・医学部長(併任)
受賞
2000年1月 東北大学医学部奨学賞金賞
2016年4月 平成28年度科学技術分野の文部科学大臣表彰(科学技術賞開発部門)
主な所属学会・役職等
日本産科婦人科学会監事、
日本婦人科腫瘍学会監事、
宮城県対がん協会副会長、
など

リレーエッセー第3回

国立がん研究センター東病院

今井光穂（平成17年卒）

大津敦先生よりご紹介頂きました今井光穂と申します。まずは、執筆の機会を与えてくださった飯野先生、大津先生に感謝申し上げます。誌面をおかりしまして、私の現況やこれまでの経験を紹介し、今後の抱負について書かせていただきたいと思います。

私は、現在、国立がん研究センター東病院 トランスレーショナル（TR）支援室、遺伝子診療部、国際研究推進室を併任しております。がんの治療は、従来のがん種別の標準治療に加えて、原因となる遺伝子異常に合わせて治療を選択する「個別化医療」が進んでいます。日本では2019年からがん遺伝子検査が保険適用となりましたが、検査を受けても、治療出口が少ないなどの原因から治療につなげる率は低いのが現状です。現職では、遺伝子異常を基に適切な治療提供を目指す SCRM-Japan や、遺伝子にオミックス解析を組み合わせた、さらなる個別化医療を目指す MONSER SCREEN とった多施設共同研究に関わらせて頂いています。その他、ビッグデータのAI技術を用いた解析や、新しい診断薬や治療薬の開発支援、病態解明を目指したTR研究、国内外のパートナーとの

共同研究、遺伝性腫瘍の外来診療等を行っています。

がんに興味を持ったのは、東北大学の学生時代でした。東北大学では、面白い友達も多く、医学祭やサークル活動・実習など、やりたいことは顔を出していったと思います。研究にも興味があり、分子病理学教室でお世話になりました。堀井明名誉教授のもとで研究を行うとともに、アメリカのバーナム研究所に留学する機会を頂き、この経験が「がん」の臨床や研究のベースとなっています。

医学部卒業後は、都立駒込病院で研修しました。当時の指導医の先生は「女性が働き続けるためには技術を身につけるべき」と、上部内視鏡検査を熱心に指導くださいました。朝から検査を始め、気が付くと夜8時。閉店間際の食堂に駆け込んで、先生と昼食兼夕食を食べたことも懐かしい思い出です。一方、担当した症例の多くは臍臓がんでした。効果的な治療法がなく、この状況を変えるにはTR研究が必要だと感じ、東京大学大学院に入学しました。消化器内科学を専攻し、主に臍臓がんと微小環境の研究を行いました。順調な大学院生活であつたら良かったのですが、研究室の異動が2回あり、さらに妊娠・出産、震災。がんの研究を続けたい気持ちから、産後1か月には復帰し、必死に毎日をこなしてい

た気がします。

博士課程修了後は、カリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）で博士研究員として、Zena Werb/Rajvir Dahiya 研究室でお世話になり、患者腫瘍組織移植（PDX）モデルマウスでの転移機序の解析、long non-coding RNA とエピジェネティクスの関係の解析を行いました。留学中は、全てが刺激的でした。垣根の低い研究室間の交流も、白熱し過ぎるラボミーティングも、ラボメンバーの家族ぐるみの付き合いも。また、がん遺伝子検査の開発や、遺伝子検査に基づき治療を検討するグループに参加できた経験は、今の仕事に繋がっています。他にも、様々な分野の医療関係者や、IT企業等産官学の多くの職種の方と知り合えたことも貴重だったと思います。

これからは、東北大学医学部の諸先輩方の名に恥じぬよう、がん医療に貢献できたらと思っています。

今回は、国立がん研究センター中央病棟の吉田健一先生をご紹介させていただきます。

略歴
今井 光穂
2005年東北大学医学部医学科卒業後、都立駒込病院レジデントを経て、東京大学大学院医学系研究科で2013年に医学博士取得。その後、2015年から2018年にかけてカリフォルニア大学サンフランシスコ校でPostdoctoral fellow (Zena Werb/Rajvir Dahiya研究室)として研究留学。帰国後2018年より慶應大学病院腫瘍センター特任助教、2022年より現職の国立がん研究センター東病院医員として、トランスレーショナル支援室、遺伝子診療部、国際研究推進室を併任。がん治療認定医、遺伝性腫瘍専門医等。



左上：エマニュエル・シャルパンティエ先生と（CRISPR-cas9を開発し、2020年ノーベル化学賞受賞）日本の研究や女性研究者について、色々なお話をさせて頂きました。
左中：留学先の研究者と一緒に
左下：留学中 AACR で発表した時
右：国立がん研究センター東病院の皆様と（大津先生や吉野先生と一緒に）

都市型医療の模索

…六本木ヒルズクリニック

平田 欽也

六本木ヒルズクリニック院長

昭和58年卒



六本木ヒルズとは

2003年4月、東京都港区六本木の12ヘクタールの敷地にオフィス棟、テレビ朝日本社ビル、ホテル棟、住居棟、映画館、プティック、レストランなど大小12棟のビルが並び、35000人が働き住む新しい街、六本木ヒルズが誕生した。

六本木ヒルズの中核となる森タワーは1フロアの床面積1400坪、地上54階の巨大オフィスビルである。このビルの5フロアを占め3000人の社員を擁するリーマン・ブラザー証券は、2008年9月12日、米国のヘンリー・ポールソン財務長官の「リーマン・ブラザーズに公的資金は投入しない」の一言で破綻した。その上階に8フロアのオフィスを持つのは、ポールソン氏が財務長官就任前に会長を勤めたゴールドマン・サックス証券である。

六本木ヒルズクリニックの誕生

1994年夏、カリフォルニア大学サンディエゴ校で心臓移植の技術取得に躍起になっていた私に、東京女子医科大学の教室から帰国命令が出た。日本でもまもなく心臓移植が始まるということだった。留学4年目で結果も出つつあり残念だったが命令に従った。

帰国後確かに心臓移植は始まったが、東京女子医大にドナー心が届くことはなく、通常の診療に追われる毎日が続いていた。そこに建設中の六本木ヒルズから医療機関の入居を求め公募案内が届き、都内の私立医大間での入居コンペティションに参加することとなった。

森タワーに設置する500坪の総合診療所に求められた条件は大学病院並みの高度な医療と国際対応である。すなわち日本人、外人を問わず、全ての患者に対し国際水準の医療を提供することであった。

果たして2001年末に我々の入居が決まったが、六本木ヒルズを運営する森ビル株式会社にもこの規模の医療機関を入居させた経験がなく、我々に提供できるノウハウを持たなかった。2003年10月の開業に向けて、我々の手探りの準備が始まった。

無床の診療所の外来治療には限界がある。我々に可能な高度な医療と

いえば、診断の精度を求められない。MRI、MDCCT、超音波診断装置、マンモグラフィを擁する放射線診断部を中央に、その両側に15診療科の外来部門と検診・ドック部門を配置する構造とした。

患者層

何かと話題提供の多い六本木ヒルズであるが、開院してみると患者層も特徴的であった。外人は全患者の15%を占める。ヒルズ内で働く欧米人は日本の保険診療の経験がないから、待つことを好まない上に、3分診療を許さず、じっくり医師と話し合うことが診療と考えている。全ての診断に根拠が求められ、「医師としての経験上」といった説明は、彼等にとっては曖昧で意味を持たない。インターネットで詳しく調べ病状から、患者自身が付けた独自の診断を覆すことが容易ならざることがある。

六本木ヒルズというブランドとの戦い

そもそも「六本木ヒルズ」というブランドは保険診療なる分野と相反する。具体的には、六本木ヒルズなる冠はレストランや高級プティックについてこそ馴染むもので、これにより誤解を受けることが多かった。美容整形、アロマセラピー、サプリメントなど、これまでおおよそ縁のなかつた自由診療の世界と混同されることに困惑

したが、「当たり前前の医療を当たり前」に遂行する」との初心を守り、自由診療は検診以外の自由診療は一切受け入れずにこれまで来た。

最近になり診療所名の「六本木ヒルズ」は入れ物の名に過ぎないことが理解され、正統な医療を行おうとする我々の意図が評価されつつあるように思う。

都市型医療とは

都市型医療を追求する当院ではあるが、特別な医療体系が存在するものではない。診察し、検査し、診断し、説明する。その一つ一つに許容される曖昧さの度合いは少ないと感じるものの、精度向上のための努力は日々我々が繰り返してきたことに他ならない。システムの無駄を省き、診療の流れにスピードを加えれば、都市型医療の実践と呼べるのではないかと考えている。

略歴

氏名 平田 欽也

学歴

1977年4月 東北大学医学部入学
1983年3月 同卒業

職歴

1983年4月 東京女子医科大学 循環器外科学教室 入局
1991年7月 米国カリフォルニア大学サンディエゴ校胸部心臓外科学教室留學
1994年12月 帰国
2001年3月 東京女子医科大学 退職
2003年10月 六本木ヒルズクリニック開設
院長就任
現在に至る

仙台から東京、そしてロンドンの近況

玉置 淳 (昭和53年卒)

GSK, Respiratory Franchise, Global Medical Expert



私は昭和53年に東北大を卒業後、出身地の名古屋に戻るのに東京で途中下車し、滝澤敬夫教授（東北大昭和26年卒）が主催される東京女子医大第一内科で研修を始めました。ところが結局、米留学期間を除いた38年間、ずっと女子医大呼吸器内科に勤務することとなり、主に喘息、COPDの研究に従事いたしました。当時は、呼吸器外科の新田澄郎教授、内分沁内科の出村博教授、心臓外科の黒澤博身教授など、良陵同窓の多士済々によって女子医大の黄金期が築かれていたのです。

そして平成30年に女子医大を定年退職した後、GSK (GlaxoSmithKline) ロンドン本社 Global Medical Expert に採用され、生活拠点をロンドンに移しました。主な仕事は、閉塞性気道疾患を対象とした新しい治療の国際共同試験をデザインすることです。また、疾患啓発活動の一環として Non-promotional な講演活動も課せられ、

ロンドンをベースとして世界10カ国余に出張しました。このため慢性的な時差ボケ状態が続きかなり辛い経験でしたが、大学を退任した高齢者を雇用し、稀なる機会を提供してくれた会社には感謝しております。

ここでコロナパンデミック直前のエピソードを一つご紹介いたします。2019年春、ノッティンガム大学で講演することになりました。ノッティンガムはロビンフッドで有名な街です（ちなみに、ヒュー・グラントとジュリア・ロバーツの映画「ノッティンギルムの恋人」のノッティンギルはロンドン市内の高級住宅地です）。この薬学・薬理学は世界大学ランキングで8位という名門で、とくにワクチンや抗体製剤の開発ではオックスフォード大学と並んで世界の最先端の研究機関です。レンタカーでロンドンからノッティンガムに行く途中、ウールストロップ (Woolstroppe) という小さな街に寄りまします。ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、ここはかのアイザック・ニュートンが万有引力を発見した地なのです。かつて17世紀に英国でペストが大流行した際、ニュートンはケンブリッジ大学から故郷のウールストロップに疎開し、ステイホーム中に万有引力を発見し、同じ時期に微分積分法も開発したのです。公園内の碑には、
「The notion of gravitation came into his mind, occasionally by the

fall of an apple, as he sat in contemplative mood」とありました。まさに、災い転じて福となす、絶望的な状況を創造的休暇に変えてしまったことに感銘を受けました。

さてその後はといえば、「歳々々々人同じからず」、コロナ禍で世界が鎖国状態になる前に日本に帰国してからは、肉体的・精神的に安らかな時間が流れています。これには、これまで F2F (face to face) が基本であった講演や会議の殆どが緊張感の少ない Web になったこと、海外の学会も Web 参加のため英語を話す機会が大幅に減ったことなどが大きく影響しています（英語は日本語に比べて子音で終わる声帯の震えない無声音が多く周波数も高いため、加齢とともにリスニングが急速にダメになるのです）。現在の仕事の大部分は自宅でのテレワークのため、週5回のジム通いで筋力・持久力がついて健康になったこと（おそらく、呼吸器病学以外にも広く科学論文を読む余裕ができたこと、平日でも気楽に国内旅行に行けることなど、予期していなかった楽しみもあります。

「人生も七十古来稀なり」といいます。私ももうすぐですが、いつになってもやらんかなの精神（烈士暮年に壯心已ます）でプラス思考を持ち続けてゆきたいと思っております。最後に、

勝とて発展を祈念しております。

略歴
昭和53年 東北大学医学部卒業
昭和60年 カリフォルニア大学サンフランシスコ校に留学
平成15年 東京女子医科大学第一内科教授同呼吸器センター長
平成30年 東京女子医科大学名誉教授
横浜市立大学客員教授
Global Medical Expert, GSK, UK

※本年度会費を未納の方は年会費五千円を同封の振込み用紙により、ご納入をお願い致します。
同封した用紙の使用でATMからの振込料は無料。現金での振込料は手数料百十円となります。
(会計担当幹事)

東北大学良陵同窓会
関東連合会 東京支部
〒121-0831
東京都足立区舎人 3-11-26
株式会社 同窓会事務局
TEL: 0120-10-9899 (内線 172)
FAX: 0120-10-9184